『カラマーゾフの兄弟』論（３）ー情熱の問題をめぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, HATANO, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000195

【論文】

『カラマーゾフの兄弟』論（3）―情熱の問題をめぐって

秦野 一宏

1.

ドストエフスキイの小説はモノローグ的ではない。かといって、ポリフォニーだと言いきるにはためらいがある。

バフチンは、ドストエフスキイの小説は対話的で、ポリフォニックであり、だからこそ「矛盾を孕んだ統一体」として扱うべきだと語っている[1)]。もちろん、作家の個人的見解が小説内に反映されていることはバフチンも認める。ただ彼は、ドストエフスキイは小説の中で、「狭い人間観や狭量な信仰心を示す見解」を「超越している」のだと主張するのである[2)]。私には、ドストエフスキイの人間観や信仰心が狭量なものだとは思えないし、小説の中でドストエフスキイが自身の個人的見解を「超越している」とも思えない。彼は、自身の考えに反論する者にも十分な場所を提供するだけのフェア精神をもっていたので、異なる見解を対等な対話として引き入れようとしただけなのだ。ただそのフェア精神は、厳格だったとまでは言いきれない。たとえば、あがなわれることのない子どもの苦しみを盾に神の世界を認めないとするイワン・カラマーゾフの考えそのものには、反論を封じるほどの力があるが、そこにイワン個人の歪み―自己への執着―が記されることで、説得力は故意に減じられている。子どもたちが苦しめられたことへの怒りと、イワン自身が苦しめられてきたことへの怒りが綯い混ぜにされることで、読者は純粋な反逆理論から遠ざけられるのだ[3)]。あるいはイワンが示す子どもへの愛着が、観念的なものでしかないことに気づく読者も多いのではないか。

『カラマーゾフの兄弟』の中心となるドストエフスキイのイデーはこうだ。あらゆる人があらゆる人、あらゆるものに対しあらゆる面で罪が

あるが、その中でも自分はもっとも罪が深い。みなが自分の罪に気づけば世界は神の栄光に満ちたものに一変し、自分もみんなから赦され、一瞬にしてこの世は楽園になる。倫理の基礎となるこの非合理的考えの正しさをドストエフスキイはおそらく、深く信じていた。ゾシマ長老の兄マルケルが死を目前にして到達したこの考えは、のちにゾシマに、またゾシマからアリョーシャへと引き継がれることになる。その対極にあるのが個の自由を基盤にした、誰にも罪はない、すべては許されているとするイワンの考え（＝「仮説」）である。フョードルの「淫蕩」もこの考えが礎になっている[4]し、出世主義者ラキーチンの生き方もこの考えに則っている。二つの考え（＝声）は同等の重さをもたされているわけではないが、双方を対比的に、できる限りフェアに示すことで、読者にマルケルたちの正しさを感得させることがおそらく、思想家ドストエフスキイの狙いであった。とはいえ、マルケル、ゾシマ長老、アリョーシャのような動かしようのない善人だけでことを成し遂げようとすると、どうしても説教臭い話にならざるを得ない。ああしなさい、こうしなさいと言われつづければ、信仰をもたない読者は中途で本を放り出すだろう。

もちろん、アリョーシャやマルケルたちにおいても、多少の変化は描かれている。アリョーシャは尊敬するゾシマの遺体が腐臭を放ったことに憤り、そのような非道を許した神に「反逆」を企てる。しかしながら、すぐあと、堕落してやれとの思いで訪れた「恐ろしい淫売」グルーシェンカとの出会いが彼を変える。実際に接してみて、彼女が「〔自分の〕姉さん」のようにやさしい女性であったことがわかると、世界への嫌悪感も神への不信感も一挙に消えてしまう。彼の反逆は、当人にはきわめて大きなことかもしれないが、読者からみれば、イワンの反逆の小さなヴァリエーションで終わってしまっている。

マルケルはどうか。まったく神の存在を信じなかった17歳のマルケルが自身の罪の深さに目覚めたのは、結核による確実な死が宣告されたからだ。いわゆる死の前の回心が起こり、一種の法悦のようなものに見舞われたのである。彼は自身の考えの正しさを「苦しいほどに」感じはするけれど、どう説明したらいいか、わからなかった。同じように若くし

て死に直面せざるをえなかった青年イポリート（『白痴』）は、自分だけが世界の中で除け者になっているという感覚をもつが、回心は起こらない。それどころか、襲いかかる理不尽な死に直面して彼は、「我あり Я есмь」という思いに突き動かされ、燃えるような生命の高揚感を味わう。しかし、いくら高揚しようとも、死という、盲目で聾の「自然」の前では、「我」は抗いようもなく、消されてしまう。イポリートはぎりぎりの自身の意志、「我あり」と叫ぶ「我」を守るために、運命に逆らい、あえて人々の面前で自殺を図った。マルケルとイポリート、どちらのドラマが読者の心を打つかといえば、まず、疑いなく、イポリートのほうであろう。

イポリートが、そしてのちにはイワンが理詰めで主張する世界の「否定 contra」に対し、マルケル、ゾシマたちの「肯定 pro」はどうしても神がかりにならざるをえない。これまでもラスコーリニコフやスタヴローギン、あるいはヴェルシーロフといった理性に絶大な信頼を置いてきた人物たちに相対するのは、ソーニャ、ムイシュキン、マカールといった穏やかな信仰者が多かった。ドストエフスキイは『カラマーゾフの兄弟』において初めて、生ける形象を通して自身の考えをもっと力強く動的に、読者の共感を得るかたちで展開する道を模索した。知性を誇らず、説教めいた物言いもしない、新たな言葉をもつ情熱家ドミートリイ・カラマーゾフが登場してくるゆえんである。

ドミートリイにはアリョーシャやゾシマ長老のような聖者ふうなところはかけらもない。少年時代、青年時代を通して、血気あふれるドミートリイは、「乱脈な」生活を送って来た。中学校は中退、その後、陸軍幼年学校に入り、軍務についたが、決闘騒ぎを起こして降格処分になっている。つい最近も、二等大尉スネギリョフの頬髯をむしり取るという暴行事件を起こしている。ゾシマは、青年の時にはそれこそドミートリイのように決闘騒ぎすら起こした過去を持つが、今ではすでに人生を達観し、長老として人々の崇拝の対象となっている。商人サムソーノフのように、「終わった」人間とは言えないが、少なくともゾシマは、今流れゆく物語の時間の中で変わることはない。一方、ドミートリイの心は煮えたぎっていて、今まさに生成の途中にある。

裁判所に入廷する際のドミートリイの「伊達男きどり」には、辟易する陪審員も多かったに違いない。彼はこの裁判の日のために「わざわざ」、自分の寸法書が残っているモスクワの仕立て屋に、燕尾服を注文していたのである。スメルジャコフが首を吊って死んだと知らされると、死者に鞭打って、「犬には犬の死に様があらあ」と口汚く罵る。どれをとっても、人々の顰蹙を買うようなことばかり。確たる証拠もないままに、彼を有罪にした陪審員たちの気持ち、その悪意はおよそ想像がつく。イワンからアメリカへの脱走の話が持ちだされた時も、百姓への軽蔑心をあからさまにし、自分は「あそこの百姓どもを我慢できるか」と自問する。こうなると、物語の読者たちの中に、愛想を尽かす者が現れてもふしぎではない。

とはいえ、この見栄っ張りで粗暴な男は、同時に、人並み外れた廉恥心もち、神をあがめてもいる。どんなに泥にまみれていようとも、常に高潔でありたいとずっと願っているし、美しいものを求め続けている。

彼はずっと揺れ続けている。しかもその揺れはけっして小さくはない。善に向かって前進しようという思いは固まっても、絶対的に神に帰依しているわけではない。判決を前にしたドミートリイの最後の発言は、いかにも人間的である。寛大な処置を願った後で彼はこう言う。「ぼくの神を奪わないでください、自分で自分がわかっているのです。不平を言うようになるってことは！[5)]」。あるいは彼には、ヨブが歩んだ苦難の道が待っているのかもしれない。

しかし、ドミートリイはイワンのように内部分裂を起こさない。ドミートリイにはイワンにはない主調音がある。重要なのは、未来に続く揺れの中で、ドミートリイという人間をどう考えるか、その主調音をどう聴きとるかである。たとえばラキーチンや検事から見れば、ドミートリイは高潔かもしれないが、所詮は自分を抑えきれない、だらしない獣にすぎない。一方、グルーシェンカから見れば、彼は獣であるが、どこまでも高潔な男であるし、アリョーシャから見ても、「情熱に呑みこまれる人間かもしれないが、高潔で、誇り高い、広い心の持ち主」である。ドミートリイの「情熱」はアリョーシャを含め、皆マイナスの価値として

捉えているけれども、それはまた、高潔な目的を実現するための原動力にもなりうる。ドミートリイの物語は、恒常的な揺れにもかかわらず、彼が変わり、思いもかけない回り道をするが、善なるものへの情熱に後押しされ、マルケルと同じような考えに到達し得たというところに力点が置かれている。

2.

マルケルの場合とは違い、ドストエフスキイはドミートリイの熱い変容の物語を細かく、具体的に語っている。それを語ることが、『カラマーゾフの兄弟』における彼の最大の仕事であると言っても過言ではない。

ドミートリイを変えたきっかけはやはり死であるが、それはマルケルのような目前に迫る自身の死ではなく、他者の死、すなわち父フョードルの死であった。周知の通り、ドミートリイはスメルジャコフの計略にはまり、フョードル殺しの容疑で捕まった。第一の大きな変化は、まず予審の段階で起きる。自分は、「ディオゲネスのランプ」を掲げて、高潔さを探しもとめてきた、いわば「高潔さの受難者」なのだと高言してはばからなかったドミートリイだが、その自己弁明のトーンがここで一挙に変わる。

「ところがやってきたことと言えば、ほかのみんなと同じように、いまわしい行為ばかりだったんです……いえ、ぼく一人だけです。みなさん、ほかのみんなと同じじゃない、ぼく一人です。間違えました、一人です、一人！[6)]」。

自身はいまわしい行為をしてきたが、それは、ほかのみんなと同じなのか、それとも同じでないのか。自分の行為を人とは違った、自分だけのものと見れば、罪は全部自分が引き受けなくてはならない。ところが、みんなも同じように悪いと感じるのであれば、その責任の度合いは極小になり、思考は停止し、良心は痛まない。ドストエフスキイの登場人物たちの多くは、この責任逃れの思考法に取りつかれているか、あるいは

その考え方の狡さに気づきながらも、それを手放すことができない。

『カラマーゾフの兄弟』で言えば、ラキーチンやフョードルはこの考えにどっぷりとつかっている。ラキーチンには聖なるもの、高きものなど端から存在しない。フョードルは、アリョーシャと暮らすようになってから、聖なるものをわずかながら感じることができるようになってきたが、それでも長くなじんだ汚らわしい世界から出ようとはしない。

「みんな汚らわしさを罵るが、そのくせみんな汚らわしさの中で生きておる。ただやつらはこそこそやるが、俺はおおっぴらにやるんだ。だから、この俺の正直さが下司野郎の非難の的になる[7]」。

みんなやっているのだから、自分がやって何が悪い、というだけではない。フョードルからすれば、自分はまだましな方で、みんなはもっとひどい罪を犯している。このような、みんなを汚らわしさの中に引きずりこむような思考法は、イワンも全面的にはねつけることはない。

ドミートリイは誇り高い男であるが、時には傲慢にもなる。チジェフスキイは、この傲慢さを強調し、ドミートリイがイワンと同じように自分のことを「高尚な」男で、自分にはフョードルについて「裁く権利」があると見做していると指摘した[8]。この指摘は一面においては正しい。ドミートリイが高潔さの高みから露悪趣味の父フョードルを軽蔑していたことは疑いない（「なんでこんな男が生きているんだ！」）。しかし、チジェフスキイは、善なるアリョーシャに注目するあまり、ドミートリイが短い時間の中で大きく成長を遂げる主人公であることを見落としている。アリョーシャとは違い、ドミートリイは、フョードルの心へ向かう道は見いだせなかったかもしれないが、軽蔑しながらも、言い争いの時に父に対してとっているひどい態度については、「心のうちで秘かに責めていた」。そして、以下の引用部分からも分かるように、少なくともモークロエ村で逮捕された時点では、かつての父親を見下す態度はすでに消え去っている。これは重大な変化である。

「そう、ぼくは、みなさん、あの男の顔立ちが気にくわなかった。どことなく破廉恥なところ、自画自賛し、どんな神聖なものも踏みにじるところ、冷笑癖も不信仰も、いまわしい、いまわしい！　ところがあの男が死んでしまった今、ぼくは違ったふうに考えているんです[9)]」。

「違ったふうに иначе」とは、どんなふうに違っているのかと予審判事に尋ねられると、彼はこう答えた。「彼をあんなに憎悪していたことが残念なんです」。「あんなに」とは、嫌悪感が高じ、どうしてこんな男が生きているのかと思えるほどまで憎らしかった、ということだ。その憎悪の念が消えたのは、彼が自身を振り返ることができたからである。「ぼく自身そんなに男前ではありませんから、ぼくにあの男をいやらしいなんて言える権利はない。そういうことなんです！[10)]」。ここで言われているのはもちろん、外見だけのことではない。「お前のつらが歪んでいるのに鏡を責めてなんになる」、という『検察官』の扉に記された痛快なエピグラフが想い起こされる。

予審が終わったあと、ドミートリイはうとうとして「奇妙な」夢を見る。馬車の中から見ると、火事で焼け出された母親たちが立っている。腕に抱かれた赤ん坊は、寒さのためにすっかり紫色になった小さなこぶしを丸めながら、むきだしの小さな両手を差し出して泣き叫んでいる。それを見て、ドミートリイは、どうして「餓鬼（がきんこ）」は不幸なのか、どうしてみんな喜びの歌を歌わないのかと、問いかける。

この「餓鬼」の夢を見たあと、再び彼の認識は大きく変わる。

「みなさん、われわれはみな残酷で、人でなしだ。いつも人々を泣かせている、母親を、乳飲み子を。だが、みんなの中で、―今となっちゃもう、こう決めつけられたってかまやしないが―ぼくが誰よりも卑劣な悪党なんだ[11)]」。

この言葉は、ゾシマの兄マルケルの次の言葉と重なる。「われわれの中の誰もがみんなに対し、あらゆる点で罪があるのですが、自分には誰より

も罪があります[12)]」。ここでは、「いまわしい」行為をしているのは「ぼく一人だけ」だという認識からさらに一歩踏み込んで、自分は「誰よりも」罪があると認めている。他人との違いを強調し、人々の罪悪を一手に引き受けるなど、逆立ちしたエリートの感があるが、すでに触れたフョードルの道化的な罪悪感の消去法とは、対極にある考え方である。

さらにここでは、マルケルの場合とは違い、「罪」の理由がはっきりと述べられている。マルケルが「自分は誰よりも罪がある」と言う時、彼はその理由を説明しきれないし、読者にもなぜ彼がそんなふうに自身を責めるのか、わからない。実際、彼の母親が言うように、世間には人殺しや強盗など悪党がいくらでもいるのだから。彼を診た医者が、「病気のために精神が錯乱している」と考えたのもふしぎではない。一方、ドミートリイの場合、彼が「誰よりも卑劣な悪党」であるのは、「〔父親を〕殺したいと思ったから、ひょっとすると実際に殺しかねなかったから」である。もちろん、殺したいと思ったからといって、そのことで逮捕されることもないし、法律によって罰せられることもない。しかしドミートリイにとっては、自身にその権利もないのに、相手をけがらわしいものと見做し、怒りのあまり、殺したいとまで願った事実は、自身の価値を最低にまで貶めるもので、まさに重罰に値する。だからこそ、彼は裁判でさらし者にされ、断罪されるという「公衆の面前での恥辱」を「受け入れ」る。そこで味わう「恥辱」が、自身を浄化してくれることを期待してのことである。

父親を殺したいと望んだのはしかしながら、ドミートリイだけではない。イワンも同じことを望んだ。しかし、彼はドミートリイのように、自分を「一番下劣な悪党」だと断ずることはなかった。

イワンに言わせれば、「みんな」が他人の死を望み、「違ったふうにиначе」生きられないとすれば、それを咎めてもしかたがない。言い換えれば、自分も「みんな」の中の一人であってみれば、自分が人の死を望んだとしても咎められることはない。「ぼくたちはみな、父を殺したいと願っている」。これは裁判所でイワンが述べた言葉である。誰もがみな罪人であれば、どうして自分だけが罪をかぶらなければいけないのか。傍

聴席ではみな、父親殺しの裁判を「見世物」として見ているが、彼らも自分と変わるところはない。ただ自分は、彼らより正直なだけだ。―すべては汚らわしいという、このフョードルゆずりの考え方の延長線上に、「すべては許されている」という彼のイデーが形成されたのだ。

もちろん、そのような「すべては許されている」というイデーだけでイワンの全体像が捉えられるわけではない。理性がどう言い訳しようとも、彼もまた、心中の父親殺しを責め、「遠い、焼けつくような」良心の痛みを感じていることに疑いはない。ただイワンの理性は、ドミートリイとは違い、自分は父を殺したいと思った、という心中の事実そのものを自分一人の罪として受け入れることは断固拒否している[13)]。

イワンはドミートリイと違い、「公衆の面前での恥辱」がなにより恐ろしい。あるいは、自分も殺したいと望んでいましたと裁判所で正直に告白しても、恥を免れることになる筋書きはありうるかもしれない、とイワンは無意識のうちに考えた。イワンの分身である悪魔は、彼の腹の底を見透かしたように、その筋書きをこう示して見せた。スメルジャコフは罪をあばかれて監獄送りになり、ミーチャは無罪になる。イワン自身は「精神的な裁き」を受けるかもしれないが、「他の連中からは称賛される」。「他の連中」といっても、見知らぬ人々のことではない。この「他の連中」については、イワン自身がアリョーシャに語っている。「カーチャはおれのことを軽蔑している、もうひと月も前から分かっているんだ。それにリーザだって軽蔑しはじめる！『ほめてもらうために〔告白しに〕行くんですよ』〔悪魔の言葉〕だと。そんなの真っ赤な嘘だ！[14)]」。リーザに言及しているところが実におもしろい。彼女からのラブレターも読まずに引きちぎってみせ、果ては 16 歳にもなっていないのにもう、「淫乱女のように色目を使う」と、悪態さえ吐いていたくせに、そんな尻軽の小娘の視線が異様に気になる。理性は、感情を抑えきれないのだ。

イワンもドミートリイも外面に拘りつづける。ただ、これまでと「違ったふうに」考えるようになったドミートリイにあっては、他人の視線を跳ね返すことができ、それが内面的な変化と結びつくのに対し、感情的に人と「違ったふうに」生きることのできないイワンにあっては、他

人の視線に呑み込まれ、結果、自己は引き裂かれてしまうのである。

3.

監獄に収監されてから裁判までは 2 ヵ月あるが、この間にドミートリイはさらに変貌を遂げる。この間、グルーシェンカとの接見が多く、その影響は絶大である。彼は、彼女の魂をそっくり自分の魂の中に受け入れ、「それを通して сквозь неё」新しい「人間」になることができた。

グルーシェンカの「魂」が具体的にどのようなものであったか。それを知るには、地主マクシーモフに対する態度を見ればいい。マクシーモフはその貧しさと卑屈さゆえに媚を売り、みんなから軽くあしらわれる人物で、イワンなどは、彼を軽蔑しきっている。たとえば、ごちそうしてやるとフョードルから誘いを受けたマクシーモフが、喜び勇んで馬車に乗り込んできた瞬間、イワンは有無を言わせず、力まかせに胸をどんと突き彼を車外に追い払う。相手が 2 メートルほども吹っ飛んだことなど意にも介さず、イワンはすぐさま、「憎々しげに」御者に馬車を出すように命じるのである。一方グルーシェンカはモークロエ村で、みんなの気を引こうと懸命に戯れ歌をうたっているマクシーモフを見て、こんなふうにドミートリイに言う。「あの人に何かあげてよ、ミーチャ。プレゼントしてあげて。だってあの人、貧しい〔бедный=不幸な、かわいそうな〕んだもの。ああ、貧しい〔不幸な〕人たち、傷つけられた人たち！[15]」。マクシーモフへの思いがマクシーモフだけで終わらず、不特定多数の＜人々＞にまで及んでいることに注意したい。このグルーシェンカの邪気のない、思いやりのある言葉は、『貧しき〔不幸な〕人々』や『虐げられた人々〔卑しめられ、傷つけられた人々〕』に底流するヒューマニズムを思い起こさせる。

ドミートリイの考えは、グルーシェンカとの接触が深まることで、すでに触れた、だれよりも自分は罪深いという考えからさらに前進する。「頭の中に居座っていたものが消えちゃったよ」と彼は面会にやってきたアリョーシャに言うが、もとより、彼を悩ましていたのは差し迫った裁判の成り行きではない。「頭の中に居座っていたもの」とは情欲である。

その情欲が消えた。彼を、放蕩三昧の暮らしに駆りたてたり、グルーシェンカの肉体美の虜にした「嵐」のような「虫けらの情欲」が消えたのだ。彼は、グルーシェンカの影響の下、その「情欲」、情熱の力を別のものに変換する。結果、「貧しい人たち、傷つけられた人たち」は泣き叫ぶ「餓鬼」の姿となって結晶し、ドミートリイのめざすべき方向が決定されてゆく。

「おれは『餓鬼』のために行くんだ。なぜなら誰もがみんなに対して罪があるんだからな。すべての『餓鬼』のためにだ。なぜなら大きな子どもと小さな子どもがいるからだ。みんな『餓鬼』なんだ。おれはみんなの代わりに行くんだ。（…）おれは親を殺しちゃいないが、でも、おれは行かなくちゃならない。おれは受け入れるよ！[16)]」。

「受け入れる」内容が極端に大きくなっている。予審の取調べの時は、受け入れるのは、公衆の面前での「恥辱」であったが、監獄ではもう、シベリア流刑も受け入れている。夢で見た「餓鬼」は、シベリアの徒刑囚の姿になる。夢では泣き叫ぶ餓鬼を救いたいと願ったが、ここでの「餓鬼」（=徒刑囚）には、悲しみにうちしおれる自身の姿も含まれている。しかし、同じ「餓鬼」にまで身を落とすとしても、今の彼には恐ろしくない。「以前は」恐ろしかったが、「今は」恐ろしくない。以前、自己に降りかかってくる苦しみが恐ろしく思えたのは、そこに意味が見いだせなかったからだ。今、シベリアで味わうどんな苦しみも恐ろしくなくなったのは、苦しみそのものに意味が付与されたからである。このように、苦しみを恐れなくなった人間を、ドミートリイは「新しい人間」と呼ぶ。2ヵ月のあいだに、彼の中では、「新しい人間」がよみがえったのである。

新しい人間はほかにもいる。ドミートリイはラキーチンの話から、科学の発達とともに、神や良心とは無関係に生き、すべてを神経の作用と見做す新しいタイプの人間が登場することを予感する。またイワンの悪魔によれば、すべてを破壊したいと願う新しい人間たちがすでに出現している。しかし、人を救おうとするのは、ドミートリイの中によみがえ

った「新しい人間」だけである。この新しい人間には泣き叫んでいる「餓鬼」を助けるという使命があった。それはまさに自己犠牲の精神に貫かれた使命である。

「新しい人間」は、地下で働く人間たち、徒刑人の「生気を失くした心」をもう一度復活させ、何年も彼らの世話をし、最後には「地底の洞穴」から、気高い魂を光のもとに脱出させ、英雄をよみがえらせることもできる。この場合、救われるのは徒刑人ではあるが、そのことによってドミートリイ自身も救われると、ドストエフスキイは考えていたにちがいない。『カラマーゾフの兄弟』の草稿にはこんなメモ書きがある。「自分は救われ得ず、他人も救えない。他人を救いつつ、自らも救われる[17]」。自分の救われることだけを願っていても、けっして救われることはないが、自分のことは考えず、他人を救うことに専心していると、結果的に自身の救いも得られる、というのだ。このような救いについて思いをめぐらせていた時、ドストエフスキイの念頭にあったのは、ドミートリイではなかったか。

ドミートリイは、酒で身を持ち崩す官吏マルメラードフ（『罪と罰』）とは違う。アル中のマルメラードフは俸給をすべて酒につぎ込み、結果、愛する娘を売春婦にしてしまった。彼は自分を人間以下だと感じるが、その罪の意識のせいでますます酒におぼれ、さらにはそうして酒に逃げてしまう自分が情けなくなり、自分を忘れるためにまたやけ酒を呑む。結局、負のスパイラルから抜け出せない。興味深いのは、マルメラードフが自身を複数化し、汚れた自分たちも最後には救われると信じていることだ。救われる価値のない者だと考えている者は、傲慢さの罪を逃れているという一点で、神の御心にかなうという論理である。これは、どんな罪を犯そうとも後悔の涙を流しさえすれば、神はおゆるしくださると考えるスメルジャコフの論理に似る。虫のいい＜救済マニュアル＞を作り、自分が救われることだけにこだわり続けた彼らには、他人を救おうという情熱はまったく感じられない。

ドミートリイは自分の罪深さを認識しつつ、自身ではなく他の人間のことをひたすら考えるようになる。自身のもっている奔放な「カラマー

ゾフの力」をすべて注ぎ込んで、いま苦しみにあえぐ人々、地底の人間たちを救いたいと願うようになる。ここで重要なのは、自分は誰よりも罪深いと考えるその謙虚さが、ばねのようにエネルギーをため、他の苦しんでいる人間を救おうとする原動力となっている点である。

「謙抑は大いなる力である」とはイポリートの伝えるムイシュキンの言葉だが、イポリート自身は、「謙抑」は、時間のたっぷりある「無邪気な人々」の専売特許だと反発する。イポリートからすれば、謙虚さなど、若くして死を押しつけられた者には何の意味もない。同じ肺病で死の宣告を受けたマルケルとイポリートを比較し、マルケルは「自己放棄」によって本来の自己を得ようとした点で、イポリートを超えていると指摘する評者もいる[18]が、おそらく、「我あり Я есмь」という感覚を押し潰すような消極的解決法では、超えられたイポリートも立つ瀬がない。そもそもマルケルは「自己放棄」をしたのかどうか。死ぬ間際、彼は弟のゾシマにこう命じたのだ。「さあ、遊びに行っておいで、ぼくの代わりに生きなさい！[19]」。その後、生涯を通して幾度も、ゾシマはこの兄の命令を思い出して涙にくれる。

イポリートの悲劇は、時の不足ではなく、代わりに生きてくれと言える人がいないことにあった。マルケル兄弟のような密な関係を、彼はこの世界で築くことができなかった。一方、ドミートリイは、餓鬼、地下の人間たちを救うために、「誰かがみんなの代わりに行かなくちゃならない」のだから、自分が「みんなの代わりに行く」と言う。「代わりに行く」のはもちろん、みんなと自分の間にある種の一体感があるためだ。ドミートリイにあっては、マルケル‐ゾシマの間に見られた親密な兄弟関係は、人間全体にまで拡げられている。

「我あり」に話を戻そう。イポリートの「我あり」はもちろん、デカルトの「我思う、ゆえに我あり」に由来している。このデカルトの哲学に関しては、イワンの悪魔も揶揄的に言及している。すなわち、この世界も、神も悪魔も何も証明されておらず、わかっているのは、自分が考えているということだけだというのだ。考えることを根拠にして「我 я」の存在を証拠づけることこそ、イワンの哲学の基本原理である。ただ、「粘

っこい春の若葉、青空が好きだ、知性や論理なんて関係ない」という言葉からも窺えるように、イワンには生を無条件に受け入れる、「我思う」を抜きにした「我あり」の感覚もある。イワンは理性と感情の狭間で引き裂かれているが、彼の理性にとっても感情にとっても、「我」がこの上なく大切なものであることには変わりはない。イワンにとっては、謙抑を絶対視し、誇り高い、能動的な＜私＞を捨てることは、奴隷に身を落とすことに等しい。このイポリートやイワンに共通する、生きたいという痛切な感覚が、ドミートリイにもある。

「おれがどんなに今、生きたいと思っているか、アレクセイ、おまえには信じられんだろうな。存在したい、意識を保ちたいというとてつもない意欲が、まさに、このぼろぼろの剥げた壁の中にいるおれの中で生れたんだぜ！[20]」。

無実なのにもかかわらず、自分を世界から隔離する理不尽な「剥げた壁」は、死を宣告されたイポリートが見続けていた「マイエルの壁」を思い起こさせる。もの言わぬ壁は二人に、自分の中の内的な対話を促す。イポリートにあっては壁は、樹木や人間のような死を強いられる生命体とは違い、ずっとそのままで在りつづけるものであり、その属性によって自分の死後を意識させるものである。夭死を運命づけられたイポリートは、この壁を凝視しながら、自身の意志を行使して命を絶つことを決意する。それが、自分を愚弄する自然へのたった一つの抵抗であると感じたからだ。謙抑とはほど遠いこの決意のなかから、彼の「我あり」が生まれてくる。

ドミートリイにおいても、もの言わぬ壁が「我あり」を生み出す。犯してもいない罪で逮捕された者にとって、この牢獄の壁は理不尽な孤立を強いるものである。しかし、ドミートリイはそんな壁の中にあって、憂鬱になるどころか、力が沸々とわき出るのを感じる。

「今のおれはな、力がありあまるほどあって、何にでも、どんな苦し

みにでも打ち勝てるような気がするんだ。ただし、『我あり Я есмь！』と間断なく自分に言いつづけられれば、だがね。何千という苦しみに囲まれても……、我ありだ。拷問に身をよじらせながらも……我あり！[21]」。

ドミートリイが「我あり」という時、その「我」は、他の「我」と切り離されたものではない。彼の最大の関心事は、意志の自由でも、「謙抑」か「我あり」かの二者択一でもなく、彼に向って泣き叫んでいる者、「餓鬼」である。ドミートリイにとって「謙抑」と「我あり」は対立するものではない、共存しうるものなのだ。というよりも、自己を中心に置かない謙虚さが「我あり」の源泉になっているのである。おそらくは、この対立から共存への転換こそ、ムイシュキンにも、マカールにもない、ドミートリイにおいてはじめて示された、新たな要素なのだろう。さきほどの引用文は次のように続く。

「杭に縛りつけられていても、やはりおれは存在し、太陽を見る。太陽が見えなくとも、それがあることは分かっている。太陽があるって分かっていること、それだけでもう、全人生なのだ[22]」。

太陽は仰ぎ見るものである。イポリートは個としての誇り（あるいは傲慢さ）ゆえに、仰ぎ見ることになるような超越した存在を否定したが、ドミートリイにあっては、至高の価値をもつ仰ぎ見るものの存在こそが、「我あり」という高揚した生命感情を支えるのである。

デカルトの「我思う、ゆえに我あり」がここでは、新たなかたちをとっている。考えるから我があるのではなく、まず、我がある。我は、考える以前の、生きていると強く感じるところから立ちのぼってくる。イポリートの「我あり」は個としての自尊心が深く関わっていたが、ドミートリイの場合は自尊心より以前に、存在することの喜び、自己を意識する喜びがまずある[23]。出発点が変わったのだ。そこからグルーシェンカという相手を得て「我愛す」という喜びとなり、さらには彼女の魂を自身のものとすることで、喜びをもって＜我救う＞と宣言する「新しい

人間」が現れる。

注意したいのは、救われる人間も、救う人間と同じく尊厳ある者、喜んで「我あり」を叫ぶ者であるということだ。

「我あり」という言葉こそ使わないが、アリョーシャにも新しい人間が生まれる瞬間がある。それは、ゾシマの棺の前で眠りカナの婚礼の夢を見たあとにやってきた。彼は歓喜に包まれ、泣きながら大地に口づけするが、立ち上がった時には、すでに「確固たる戦士」になっていた。ゾシマは修道僧たちに大地への口づけを愛するようにと説くが、大地への口づけによって恍惚感が得られるのは、どうやらアリョーシャのような「数少ない選ばれた者」だけらしい[24]。

ドミートリイは、神によって選ばれた者ではない。それどころか、「荒廃した心の救いを大地との結合に求めようにも、おれにはそれもできない」と、彼は大地への口づけそのものを拒否する。自分は「百姓や羊飼い」にはなれない、というのがその理由だった。

といってもドミートリイが、大地とのつながりを断ち切ろうとしているわけではない。彼は彼で、ゾシマ、アリョーシャ流の宗教的な法悦とは別の仕方で、大地と関わろうとしている。彼は徒刑囚という苦しみを担う者として大地の奥深くに入り込み、大地と一体化しようとする。大地との「結合 союз」ではなく、大地そのものになろうとするのである。

「徒刑囚は神なしではやっていけない、徒刑囚でない人間よりも、もっとやってゆけない！　で、神に会えたら、おれたち、地底の人間どもは大地の中から из недр земли、喜びの源である神に、悲劇の讃歌を歌うんだ！[25]」。

「地底の人間ども」の「人間ども」は、ふつうに使われる люди ではなく、古い言い回しの человеки があえて用いられている。これはおそらく、一人ひとりが我ありを叫んでいるさまを言いとったものなのだろう。「顔」のない抽象的な人間しか愛することができないというイワンとは、対照的である。ドミートリイにとって、この具体的「人間ども」はやつ

らではなく、「おれたち мы」である。百姓を軽んじ、ノーブルを気どるドミートリイだが、だからといって彼が民衆的でないとは言えないのだ。ドストエフスキイ自身はかつて監獄で、この「人間ども」とともに暮らしたことがあるが、そこで出会ったあらくれ者たちの、心の底から神を信じている姿に、ロシア民衆の原点を見たのであった。

4.

すでに触れたように、ドミートリイの歩く道はアリョーシャやゾシマの歩く道とは違う。アリョーシャは広くて明るい、まっすぐな「大通り дорога」を歩いて行く。一方、ドミートリイは薄暗く、曲がりくねった、悪臭ふんぷんたる「路地 переулок」に入って行く。

ドミートリイはグルーシェンカを「メス猫」、「極道女」と呼び、彼女のもとに走る行為を「路地」に行くと表現するが、その路地はまた、婚約者を裏切った卑劣な男が身を隠すための「闇」を提供してくれる場所でもあった。アリョーシャによれば、ラキーチンが「路地」に入って行くのも、自分に薄暗いところがあるからだ。ラキーチンは人を裏切っておきながら、そのことを謝罪せず、むしろ自分はユダ扱いされたと逆に食ってかかって来る。アリョーシャには、彼が「自分の受けた侮辱」のことを考え続けるかぎり、路地に入って行くように思えた。

ドミートリイは、ラキーチンのようにむしゃくしゃした思いを抱いて路地に向かうわけではない。彼は、いつも汚れた路地が好きだった。というのも、広場の裏にある、暗い、陰気な曲がりくねった裏通りには、なにかしらの冒険があったからだ。ドミートリイの比喩を使えば、その「泥」のなかには「塊金 самородок」があった。

この「泥の中の塊金」は、『作家の日記』（1876 年 1 月号）で展開されたドストエフスキイの民衆論の中の「泥の中のダイヤモンド」という表現を思い起こさせる[26]。どうやらドストエフスキイは美を美だけで示すつもりはないらしい。ナスターシャ・フィリポヴナの写真を見て、ムイシュキンはその美しさに打たれる。しかしその美しさが真の美しさとなるのは、彼女が泥沼から這い出たあとである。ナスターシャは幼い時か

らトーツキイの「囲い者」になるように育成され、妾として 4 年余りを「慰み村」で過ごした。自殺も考えたというこの泥沼の中から、彼女は無垢なまま出ることができた。『カラマーゾフの兄弟』の中で、このナスターシャの位置にあるのは、若くして恋人に捨てられ、商人サムソーノフの囲い者となったグルーシェンカである。彼女はあくどいことをしながら金を貯めることに熱中し、人を陥れたりすることも辞さない女として悪名を馳せていたが、一方で、そんな自分を恥じ、善良でありたいという純粋な気持ちをもちつづけていた。ドミートリイが路地で発見した「塊金」のなかでも、グルーシェンカはとびきり輝く大粒のものであった。

ドミートリイは路地で不満をまきちらすだけの陰湿なラキーチンとは違い、路地に身を置きつつ、理想を追い求める。彼の「路地」はのちに流刑者たちが労役で追いやられる地底のイメージに変化してゆくが、そこでも彼は路地におけるのと同様、太陽を愛し、神を強く信じている。彼は、フェラポント神父のように、精進や苦行で神の寵愛を得ようという気持ちはさらさらない。ドミートリイの神は、ギリシャ的、ディオニュソス的である。彼が崇拝するのは、彼が口ずさむシラーの詩「エロイジスの祭典」に示されるような、常に「永遠なる喜び」とともにある神である。

「神の創りし魂を／永遠なる喜びが、うるおしてくれる／その喜びは、醗酵の神秘なる力にて／命の杯に火をともし／一茎の小草も光の方へ招きよせる／（…）／恵み豊かなる自然の胸より／生あるいっさいは喜びを吸い、／生きとし生けるもの、もろもろの民も／その喜びにのみあこがれる。喜びは不幸に沈める我々に友を、／ぶどうの酒と美（カリテス）の冠をさずけ、虫けらには情欲をさずける……[27]」。

主語がすべて喜びであるということに注意しよう。喜びが、「ぶどう酒」とともに「美の冠」を授けてくれるというのだ。ドミートリイにとって生を支える根源的なもの、それは躍動する喜びと美である。

ぶどう酒は、アリョーシャが夢でみたカナの婚礼にも現れた。キリストが客たちの歓楽が途絶えぬよう、水を酒に変えているのは、まさに人々に喜びをもたらすためだ。「人を愛する者は、その喜びをも愛する」というゾシマの教えがこのアリョーシャの夢を色づけている。この婚礼にある喜びは「素朴でなんの飾り気もない」ものであり、そこに招かれているのは生涯で「一本の葱」を恵んだことのある、穏やかな善良な人たちばかりだ。アリョーシャは夢の中で、「喜びなしには生きられない」というドミートリイの言葉も思い出すが、彼のような飲んだくれは招待客の中にはいないだろう。ここでは、美への言及はない。一方ドミートリイのぶどう酒は、激情、恍惚、酩酊を誘うディオニュソスの酒である。ちなみに彼が散財し、火をつけたモークロエでの飲めや歌えのどんちゃん騒ぎは実際、「ディオニュソスの祭り оргия に近いもの」であったと記されている。

ドミートリイが飲みながら朗誦するシラーの詩の中では、喜びが「不幸に沈める」我々に酒と「美の冠」を授けると記されていたが、この美はアポロン的な端正のとれたものではなく、ディオニュソス的な、秩序を外れたものであろう。イワンは自分の頭脳がユークリッド的人間のものであり、たとえ平行線が交わって、それを自分の目でも見とどけたとしても、それを認めはしないと言う。たとえ神が創った世界であっても、理性で理解できないものは「受け入れない」というのが、彼の「本質」であり「テーゼ」であった。一方、ドミートリイは理性よりも感覚を信じる。彼が判断の基準とするのは正しいか、間違っているかという自身の知性の「結論」ではなく、生きる己が体全体で感じる「定義できない」美と喜びの感覚である。「ここ〔美の中〕じゃ、川の両岸がまじわって、あらゆる矛盾がいっしょくたになっている」とドミートリイは言う。彼はイワンとは異なり、平行線の交わる世界を受け入れる。たとえ、自身の頭脳で理解できない非ユークリッド的な世界であっても、美しいと感じることができれば、喜んで受け入れるのである。

「理性には恥辱だと映ることが、心には美そのものと思える。美はソ

ドムの中にあるのだろうか。いや、圧倒的多数の人間にとっちゃ、美はソドムの中にこそ潜んでいる。たまらないのは、美がおそろしいだけでなく、謎につつまれたものであることなんだ。ここでは悪魔と神が戦っているんだが、その戦場は、人間の心なのさ[28]」。

この一節によって浮き彫りにされるドミートリイは、イワンだけではなく、ドストエフスキイがこれまで描いてきた「健全な理性」の崇拝者たち、ラスコーリニコフやスヴィドリガイロフ、スタヴローギン、ヴェルシーロフたちすべてへの生きたアンチテーゼである。知性、教養に関しては、「ぷつぷつ途切れる壊れ頭」とか「イワンと比べ、まったく無教養に近い男」と見下されるドミートリイだが、このある種の教養のなさ、奔放さが、彼の豊かな感情を生み出す源になってもいるのだ。彼の＜生の＞哲学は論理、知性ではなく、たとえ矛盾ばかりであろうとも、理屈抜きの実感、美と生きる喜びから紡ぎ出される。

面白いのは、スタヴローギンとドミートリイという対蹠人がともに、自分を虫けらに重ね合わせていることだ。「わたしは自殺し、卑劣な虫けらとして自分を大地から掃き出してしまわねばならないことを知っている[29]」。こう言って、ありあまるほどの西欧的教養を身につけながら、卑しい虫けらでしかなかったスタヴローギンは、健全な理性の要求通りに、実際に首を吊って死んでしまった（痛くないよう絹紐に石鹸をたっぷり塗りつけて！）。一方、自分は虫けらそのものだとドミートリイが言う時、この「虫けら」は、「情欲」を授けられている特別な虫けらなのである。この情欲は、いかに卑しくはあろうとも、喜びによって支えられている。そしてその喜びの根源には神があり、だからこそ、彼は神に感謝の思いを抱く。

理性人たちはみな、教養が高く、ある種のエリート意識をもっている。『未成年』の草稿ノートには、ヴェルシーロフのせりふになる前のこんなメモ書きがある。「われわれは、かつての人々のうちの〔選ばれた〕千人だ。われわれは、結論を導き出したら、それで満足だ。これが、われわれにとっては生の代わりなんだ[30]」。

自身の自由をこよなく愛する彼らは、あらゆる束縛を嫌うが、わけても恋は彼らの鬼門である。恋は＜知＞で武装した心の平安を乱す恐れがあるので、おいそれとのめりこめない。彼らは、自分を振りまわすわけの分からない感情から身を守るために、時に、支配・被支配のシステムに頼る。たとえば、ヴェルシーロフの考える理想的な＜愛＞は、健全な理性の監視下、「プログラム」として、規律正しく体系的に進行するものであった。また、スヴィドリガイロフにとっては＜愛＞は、手練手管を弄して相手を征服するゲームであった。

繰り返すが、ドミートリイ・カラマーゾフはこうした理性人たちの対極にいる人間である。彼はまさに無考えに、感情の赴くまま一途に恋に走る。彼が望むのは、論理に導かれた「生の代わり」となる「結論」などではなく、生そのものである。かつてラスコーリニコフはソーニャを、スタヴローギンはキリーロフをそれぞれ、「健全な理性」なき人間と呼んで軽んじたが、ドミートリイには、「健全な理性」なきソーニャやキリーロフと通じるところがある。

実際、ドミートリイはラザロの復活を信じるソーニャのように「奇跡」を期待する。たとえば彼は、父親から３千ルーブルを調達してきてくれるように、アリョーシャに頼む。父フョードルの金はもともとドミートリイの母親の金を元手に作ったものなので、道義的には借りがあるかもしれないが、そんな正義をいくら振り回しても、フョードルは聞く耳をもたないだろう。もちろん、ドミートリイもそんなことは百も承知している。父が絶対に聞き入れないことを知りながら、ドミートリイはそれでも奇跡を信じる。「恐ろしい事態」が起こるのを、神は見逃すはずがない、というのが、彼の奇跡を信じる理由である。「健全な理性」の保持者からすれば、感情だけで、根拠もなく奇跡を信じるソーニャやドミートリイは、まさに狂信者としか言いようがない[31)]。

もう一人、「健全な理性」が欠如していると言われるキリーロフはどうか。スタヴローギンによれば、キリーロフがあれほどイデーに没頭することができたことも、また、真理を証明するために自分の命も差し出す「心の広さ」が彼にあったことも、みな「健全な理性」の欠如に原因が

ある。ドミートリイもまた、「餓鬼」を救うという自身の考えに没頭する。無実の罪をひっかぶりながら、心の底から、苦しんでいる人々を救おうというのだ。しかもこの男は冤罪を憤るどころか、自分には誰よりも罪があるなどというたわけたことを口にする。こんな「心の広い」妄想男は、理性に呪縛されたスタヴローギンたちから見れば、無教養の「壊れ頭」であり、哀れな阿呆にすぎない。

5.

「我思う」にこだわるスタヴローギンたちには、不合理な「我あり」という感情の高まりがない。だから彼らには、自身の生を更新することができない。では、この内から突き上げて来る「我あり」という意識は、どこから来るのか。イポリートの場合は、迫りくる死が生を賦活したと考えられるが、ドミートリイの場合はどうやら、父譲りの「カラマーゾフの力」が関与している。この「力」は、ショーペンハウアーの「盲目なる意志」にも似た、わけのわからぬ力である。たとえば、アリョーシャはリーザに、その力の制御しがたさをこんなふうに語っている。

「兄たちは自分をだめにしているんです。父もです。自分と一緒にほかの人たちもだめにする。ここにはこの間パイシイ神父が言ったように、『地上的なカラマーゾフの力』がはたらいている。地上的で凶暴で、粗野な力です。この力の上に神の精霊が飛んでいるのかどうかも、わからない[32]」。

この生（なま）の力は使い方がむずかしい。「法が人間から奪われたのに、新しいものがまだ見つからず」、それを見つけようと「あらゆる方向への動きを試みる」時の「異常、苦悩」、―ローザノフはこんなふうに「カラマーゾフ気質」を定義した[33]が、それはまた、カラマーゾフ的な力のありようを示してもいる。たとえばスタヴローギンは結局、死に至るまで、自身に付与された同種の生の力を使いこなすことができなかった。力は絶大で、周囲の者たちを惹きつけるけれども、その力を善なるもののため

には使えない。スタヴローギンは、シャートフにもキリーロフにも思想面で絶大な影響を及ぼしたが、前者に受け入れられた神人論も、後者に受け入れられた人神論も彼にとっては、こんなふうにも考えられるという抽象的な議論の「試み」でしかなかった。彼には神の創った世界を肯定することも否定することもできるが、どちらかを選択することはできない。なぜなら善をなしたいという思いも悪をなしたいという思いもありはしても、どちらも「底が浅い」からだ。放蕩も「試み」たが、彼は「放蕩を好まないし、欲しもしなかった」。少女凌辱はそのようななまぬるい彼が、刺激を求めて犯した許しがたい犯罪である。

スタヴローギンには、何ごとにも動じない理性はあるが、ドミートリイのような理想に向かって＜突進する力＞がない。彼の力は、突如、人の鼻づらをもって引き回すというような無意味な行為によって象徴されるように、最後まで方向性をもたないのだ。

とはいえ、この方向性をもった力、情熱なくしては、どこにも行きつけない。「作者」は、ゾシマの遺体が腐臭を放った時のアリョーシャの「動揺」に関連させて、こんなふうに語っている。「場合によっては、たとえ、無分別であれ、大いなる愛によって生じた情熱に身を投じることは、そういう情熱にまったく動じないままでいることよりも、尊敬に値する[34)]」と。

ドミートリイにあっては、アリョーシャとは比べものにならないくらい、情熱は抑えがたく燃え上がる。この情熱は最初、グルーシェンカに向けられたが、その力をドミートリイは他の人間たちを救うことに向けるようになった。宗教的な回心が起こらなくとも、美しいものと接触すると、地上の情熱が、人間を変貌させることもあると、ドストエフスキイは信じていたのである。

ドストエフスキイ以前にも、ゴーゴリやレールモントフのように、人間を引きずってゆくような、歯止めのない情熱に強い関心を寄せた作家がいた。カラギョースという駿馬を見た瞬間からもう、それが欲しくて欲しくて堪らなくなり、そのために父を見捨て、姉を売りとばしてしまう若者の話（『現代の英雄』）や、苦労に苦労を重ねようやく新調した外

套を盗まれてしまい、死んでも死にきれず幽霊になって街を徘徊する男の話（『外套』）を読むと、人間の情熱というものが持っている巨大な力に改めて思いが行く。ゴーゴリは、このような、当人にはどうしようもできないような巨大な情熱には、何らかの神慮が働いているのではないかと考えるようになった。

こうして『死せる魂』でゴーゴリは、どんな情熱も力であり、その力はどれも、徳と共通の根をもっているとするシェリングの情熱論（『人間的自由の本質』）にならい、神意を推し量りつつ、卑俗な情熱の聖なるものへの変換を目論んだ。金儲けへのあくなき欲望を持ちつづけるチーチコフを通して、その悪から善へ、死んだ魂から生きた魂へ復活してゆく様を描こうとした。しかしその壮大な試みは結局、失敗に終わった。金儲けの情熱は所詮、善には向けられないと思いいたったのである。結局ゴーゴリは謙抑を事とし、聖なるものに捧げられるものを例外として、すべての情熱を消し去ることが、人間としての生きる最良の道であると考えるにいたった[35]。

ドストエフスキイも傲慢を避け、謙抑を重要視する点では、ゴーゴリに勝るとも劣らない。周知の通り、有名な晩年の「プーシキン演説」では、アレーコやオネーギンたちの最大の欠陥を謙抑の欠如に見ている。しかしドストエフスキイは、謙抑を重視するあまり、誇り、情熱まで完全に否定してしまったゴーゴリの轍は踏まなかった。その証となるのがドミートリイである。『白痴』でもロゴージンという情熱の権化とも言える人物を登場させたが、彼のナスターシャ・フィリポヴナに寄せる「苦痛をおぼえる」ほどの情熱は、相手を殺害するという悲惨な結末で終わらざるをえなかった。「きみの恋は憎しみと少しも区別がつかない」とムイシュキンは言うが、実際、ロゴージンはナスターシャとともにいても、少しも喜びを感じることができない。一方ドミートリイの場合は、グルーシェンカといる時には嫉妬の念もきれいに消え、ともにいることを心の底から喜ぶことができる。

ドミートリイの情熱あるいは「情欲」を特徴づけるのは、まさにこの「喜び」である。「虫けらには情欲をさずけた」。下等なものには下等な

ものなりの喜びがある。虫けら、動物、人間、聖者……。虫けらにとっては「情欲」が喜びであり、聖者にとっては聖なるものに仕える情熱が喜びである。喜びという面からすれば、そこに質的断絶はない。

ゴーゴリの思い描く情熱は否応なく人間を引きずっていくもので、その力は神とは関係づけられてはいたが、喜びとは縁がなかった。しかし、繰り返すが、『死せる魂』第二部に行き詰まる前のゴーゴリは、少なくとも、情熱の力は信じていた。1843 年 2 月 26 日付のダニレフスキイ宛の手紙で、彼は書いている。「いったい、きみは、不満足と憂鬱という我々の世代すべてが捕らわれている病が、きみを巻き込んでいるのだって感じないだろうか。それに負けないためには、我々自身の胸の中にきわめて堅固な抵抗が必要なのだ。何か全霊で選ばれたものへ向かう力が、言い換えれば、内的な目的、強い対象、何に向かってもいいが、やはり何らかの情熱 страсть が必要なんだよ[36]」。このようにゴーゴリは情熱を「不満足と憂鬱」の時代に不可欠なものと考えていたが、面白いことに、1846 年にはキルケゴールが、「現代」を「分別のある時代」だと見做し、情熱の必要性を説いている。「現代には情熱がない。だれもがたくさんのことを知っている。どの道を行くべきか、行ける道がどれだけあるか、われわれはみんな知っている。だが、だれひとり行こうとはしないのだ[37]」（『現代の批判』）。

憂鬱な時代であろうが、分別の時代であろうが、時代に流されないためにはある種の情熱が必要だ。高尚な理想主義も時代に流されてしまうと、言葉だけ、あるいは美しさを求めて夢想するだけで終わる。「将軍の息子」トリシャートフ（『未成年』）は中学生の頃、ディケンズの『骨董店』を読みながら、その美しさに打たれ、ぼくたちも同じように「よい人間になろう」、「美しい人間になろう」と姉と誓い合った。しかし、このトリシャートフには、夢を実現する力がない。時代に流され、いつしか生きる目的が、享楽になってしまい、今ははるか昔の美しい思い出に浸るだけで、実際には「余分な金がなくては生きてゆけない」という体たらくに陥っている。『カラマーゾフの兄弟』でいえば、子どもっぽいカルガーノフがいる。彼は自分でも心やさしい男だと自負している、繊細

な心をもった若者だが、毎日これということもせずに、いつも放心状態で、なにやら空想ばかりしている。現実に焦点があっていない。ドミートリイが逮捕された時、彼は人々の意見に流され、当人が無実だと言っているのを端から信じず、人間世界は絶望的だと大仰に嘆いている。人生の傍観者カルガーノフには、自分は無実だと叫ぶドミートリイの言葉を信じきるだけの力はないのだ。情熱に欠ける彼の理想主義はあまりにも弱々しく、安っぽい。

ドミートリイはグルーシェンカに出会う前は、最高の価値を遠くにしか感じられず、放蕩三昧の暮らしを続けていたが、それはスヴィドリガイロフのような退屈しのぎのためではない。すでに述べたように、ドミートリイは放蕩という「路地」をさまよい、そこに「塊金」を見つけることに大いなる喜びを感じていたのだ。

グルーシェンカという「塊金」に出会ってからは、その一途な情熱、「カラマーゾフ」のエネルギーが放蕩以外のはけ口を見出したかのようである。そしてグルーシェンカとの恋が成就すると、彼女の影響下、今度は、その情熱を不幸な人々、泣き叫ぶ餓鬼たちの救出に向ける。彼は餓鬼たちのために何かをしたいと願うと、その願いは彼を燃え上がらせ、もう居ても立ってもいられなくなる。まさに情熱に突き動かされているのである。

「それは（…）この瞬間からもう誰の目にも一滴の涙もなくなるようにするためであり、しかもそれを今すぐ、今すぐやり遂げたいのだ、先送りせず、どうあっても、カラマーゾフ流の奔放さをあらん限りに発揮して、そうしてやりたいのだ[38]」。

この餓鬼（がきんこ）の夢の中で、グルーシェンカのやさしい声が耳もとで響く。「これからはあたしもついて行くわ、けっして見捨てないからね」。するとドミートリイの願いはいっそう強まる。「生きて、生きぬきたいと思う、どこかの路へ、自分を呼び招く新しい光のもとに行きたくてしょうがない。それも早く、早く、たった今、今すぐ！[39]」。この夢がこれ

からのドミートリイを導くことになるが、その性急さはもう度を越していて、滑稽ですらある。その誇張はフレスタコーフ（『検察官』）の口から出たかのようで、せっかちなところは、「今すぐに」「もっと早く」を口癖にするコチカリョーフ（『結婚』）そっくりだ。

しかし性急であるのは一面では、願望があまりにも強すぎて、いてもたってもいられないからだ。このドミートリイの性急で熱い言葉を、トリシャートフの落ち着き払った反省の言葉と比べてほしい。

「おお、本当に、ぼくらは誠実な人間になりたいと、心の底から望んでいるのです。ただ、先へ先へと延ばしてばかりいるんです[40]」

「誠実な人間になりたい」、「心の底から望んでいる」という美しい言葉は内実をともなわない。ドミートリイは違う。彼は、何が真の善なのかわからず鬱屈し、放蕩三昧の暮らしをしていた時でも、「シラー愛好者」の旗を降ろすことはなかった。そして、これが俺のなすべきことだと感じると、なりふりかまわず全力で走りだす。その高邁な理想を掲げてしゃにむに前進しようとする滑稽な姿はまさに、遍歴の騎士ドン・キホーテを彷彿させる。ドストエフスキイによれば、このセルバンテスの書『ドン・キホーテ』に親しむと、若者の心は、「永遠に変わらぬ愚かな中庸」や、「俗悪な分別」に対する崇拝から遠ざけられるという[41]。滑稽に見えることを極端に恐れるスタヴローギンやスヴィドリガイロフたちは、ドン・キホーテにはなれなかったし、なりたくもなかっただろう。

ドストエフスキイによれば、ドン・キホーテはロシアと重なる。ロシアはずっとヨーロッパ的生活を余儀なくされてきたが、それでも自身の「平穏」にのみこだわるヨーロッパとは違い、ドン・キホーテのように、「自分のためではなく、他人の利害のために、つまり『全人類的利害』のために生きてきた」というのだ[42]。

さらに言えば、ドストエフスキイにとってロシアの核をなすのは、民衆である。この民衆について彼は、こんなふうに述べている。ロシアの民衆は、さまざまな事情でずっと悪環境に置かれていたにもかかわらず、

「人間としての美」を保ってきた。今もロシア民衆は「醜行」を繰り返しつつあるが、彼らを論ずるには、現在の姿においてではなく、彼らの理想、「彼らがかくありたいと望んでいるもの」、「つねに憧憬している偉大にして神聖なる事物」に準拠しなければならない[43]、と。

ここで面白いのは、検事が論告の中で、「ヨーロッパ主義」と「民族的原理」をそれぞれイワンとアリョーシャの特徴とする一方で、ドミートリイを評して、「今あるあるがままのロシアを体現している」と述べていることだ。これはおそらくドストエフスキイ自身の見立てでもあろう。先に私は、ドミートリイという人間をどう考えるか、その主調音が重要だと言ったが、ここでは同時に、ロシアをどう考えるかが大きな問題となる。

ひと言でいうと、検事はロシアを、心底、下劣で危険だと考えている。彼はゴーゴリにならい、「今あるがままの」ロシアを疾走するトロイカに喩えた。彼によれば、トロイカの「抑制のきかないむちゃな疾走」のために、文明は破滅に導かれる、という。

ドストエフスキイの見解は違う。すでに述べたように、今あるがままのロシア、今あるがままの民衆は、醜悪かもしれないが、心底においては、高潔だと彼は信じていた[44]。そしてこのロシア、あるいは民衆に対する見方は、とりもなおさず、ドミートリイに対するドストエフスキイの見方でもあった。

ゴーゴリのトロイカに乗っていたのは、チーチコフである。ゴーゴリは、チーチコフの情熱の力が変換可能だと信じきれなかったが、ドストエフスキイはチーチコフをドミートリイに置き換えることで、再度、疾走するトロイカが使命を果たす時が来たと考えた。ロシアもドミートリイも、「餓鬼」の救済という新たな方向に向かうと、ドストエフスキイは固く信じていたのである。

注

1)　M. バフチン、岩本和久訳「多声的な言葉－バフチンとの会話」(『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房、1997 年、所収)、12 頁。

2)　同上。

3)　イワンたちはイデーの体現者で終わらない。だからこそ、人物が生きているのだと言える。詳細は、拙稿「ドストエフスキイにおける子ども―『カラマーゾフの兄弟』をめぐって」(海上保安大学校「研究報告（法文系)」第 52 巻第 2 号、2008 年 3 月)、33-38 頁を参照。なお、本稿は、上記の論文及び「ドストエフスキイにおける科学と自由―『カラマーゾフの兄弟』論（2)」(海上保安大学校「研究報告（法文系)」第 57 巻第 1 号、2012 年 11 月）の続編である。

4)　ボチャローフの指摘するように、「道化」とはいえ、フョードルの「淫蕩」があまりにも真剣であるのは、それが単なる「情熱」ではなく「イデー」となってしまっているからだ。См.: Бочаров С.Г. О двух Пушкинских реминисценциях в «Братьях Карамазовых» – В кн. : *Достоевский. Материалы и исследования (2).* «Наука».Санкт-Петербург. 1976. Стр.150.

5)　Достоевский　Ф.М.　Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.15. «Наука». Л. 1976. Стр.176.『カラマーゾフの兄弟』のテキストには、本全集 14 巻、15 巻を用いた。以下、本全集は『ドストエフスキイ 30 巻全集』と略記する。

6)　『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、416 頁。

7)　同上、157-158 頁。

8)　Чижевский Д.И. Шиллер и «Братья Карамазовы» – В кн.: *Достоевский. Материалы и исследования (19).* «Наука».Санкт-Петербург. 2010. Стр.36.

9)『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、416-417 頁。強調は筆者。以下、断りがない限り、強調は筆者のもの。

10)　同上、417 頁。

11)　同上、458 頁。

12)　同上、262 頁。

13)　吉村善夫のように、イワンには「罪の意識」がなかったと断ずる評者もいる(『ドストエフスキイ―近代精神の克服』新教出版社、1965 年、403 頁を参照)。しかし、イワンにまったく罪の意識がなかったならば、悪魔など出現しようもなかったし、アリョーシャも、「父を殺したのは、あなたじゃない」と繰り返し、執拗に言う必要もなかっただろう。

14)　『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 15 巻、88 頁。

15)　同上、第 14 巻、397 頁。

16)　同上、第 15 巻、31 頁。

17)　同上、第 15 巻、244 頁。強調はドストエフスキイ。下線部分の原文は以下の通り。*Спасая других, сам спасаешься.*

18)　近田友一「ドストエフスキーと“マイエルの壁”」(「法政大学教養学部紀要」人文科学編 42 号、1982 年 1 月)、134 頁を参照。

19)　『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、263 頁。

20)　同上、第 15 巻、31 頁。

21)　同上。

22)　同上。

23)　ちなみに、ゾシマの説くところよれば、人間には、命のある間という「時間と期限」付で、「我あり、ゆえに我愛す Я есмь, и я люблю」と言いうる能力が贈り物として授けられている、という。イワン、ドミートリイ、ゾシマの三者から、「我

あり」という言葉が出てくるのは面白い。

24） 周知の通り、『罪と罰』では、ソーニャが殺人者ラスコーリニコフに対し、大地に口づけするように求める。「すぐに、いますぐに外に出て、辻に立ち、礼拝し、あんたが穢した大地にまず接吻するのよ。それから全世界に向かって、四方に礼拝し、そしてみんなに言いなさい。『わたしは殺人を犯しました』って。そうすれば、神さまはまた、あんたに命をお与えになるわ」（『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 6 巻、322 頁）。大地への口づけはここでは、謝罪、悔悟の意味をもっている。

25） 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 15 巻、31 頁。

26） 同上、第 22 巻、43 頁を参照。

27） チュッチェフ訳。同上、第 15 巻、99 頁。

28） 同上、第 14 巻、100 頁。

29） 同上、第 10 巻、514 頁。

30） 同上、第 16 巻、419 頁。

31） ホフラコワは、ゾシマが奇跡を起こさなかったという理由で神を信じるのをやめるが、その後、自分がドミートリイに殺されなかったのはお守りの十字架のおかげであったと考えるや、すぐさま信仰者に転向する。ドミートリイが奇跡を信じるからといって、軽佻浮薄なホフラコワと同一視するのは、ことの本質を取り違えていると言わざるを得ない。実際、ドミートリイの場合、ある種の奇跡は起こったのではないか。父親の殺害という「恐ろしい事態」が避けられたのは、ドミートリイの言葉を用いれば、「悪魔が敗れ去った」ためである。また、グリゴーリイが命をとりとめたのも、彼に言わせると、祈りが通じて起きた「偉大な奇跡」である。このような奇跡はしかしながら、別の一面から見ると、自身の信念に従って、作者であるドストエフスキイが故意にしつらえた＜超自然＞である。

32） 同上、第 14 巻、201 頁。

33） Розанов В.В. *Мысли о литературе*. «Современник». М. 1989. Стр.202.

34） 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、306 頁。ここでの「情熱」は原文では увлечение である。

35） 詳細は以下の拙稿を参照されたい。「情熱の彼方―ゴーゴリの晩年」（海上保安大学校「研究報告（法文系）」第 55 巻第 1 号、2010 年 11 月）

36） Гоголь Н.В. *Полн. соб. соч. в 14 томах*. Т.12. АНСССР. М.-Л. 1952. Стр. 135.

37） キルケゴール、桝田啓三郎訳『死に至る病　現代の批判』中央公論社、2003 年、330 頁。

38） 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、457 頁。

39） 同上。

40） 同上、第 13 巻、352 頁。

41） 『作家の日記』（1877 年、9 月号）、同上、第 26 巻、25 頁を参照。

42） 『作家の日記』（1877 年、2 月号）、同上、第 25 巻、49 頁を参照。

43） 『作家の日記』（1876 年、2 月号）、同上、第 22 巻、43 頁を参照。

44） 1876 年 2 月号の『作家の日記』で、ドストエフスキイは、「我々〔ロシア人〕はみな善人である以上、何もかもうまくゆくと記している（同上、25 頁）。ドストエフスキイにおいてはロシアへの信頼、ロシア民衆への信頼は、人間そのものへの信頼にも繋がっているようだ。たとえば、グルーシェンカが酔いに任せてこんなことを言う。「この世の人はみんなすばらしい、一人残らずみんなよ。この世はすばらしい。わたしたちは汚らわしい人間だけど、この世はすばらしい。わたしたち、汚らわしくて、すばらしい……」（同上、第 14 巻、397 頁）。